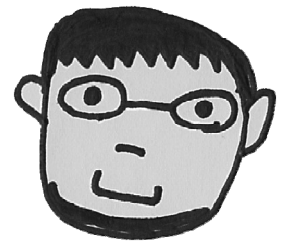


巻頭言

日本フラックス成長研究会と歩んだ10年

Ten Years of My Involvement with The Flux Growth Society of Japan

手嶋 勝 弥*



(イラスト Emily)

十年一昔と言いますが、はやいもので日本フラックス成長研究会は今年で10年目を迎えました。この10年は、日本を取り巻く情勢をはじめ、学界や産業界にとっても激動の期間だったと思います。自分自身を振り返ってみても、信州大学の教員生活が満10年になりました。齢を重ねると月日が経つのが早いと良く聞きますが、まさにそれを実感した10年でした。私がフラックス結晶育成研究の師と仰いでいる大石修治先生(前日本フラックス成長研究会会長、現顧問)も、この3月で無事定年退職されました(本当に長い間、お疲れ様でした)。私にとっては、フラックスにまつわる一番大きな出来事です。2005年に信州大学の教員(当時、助手)に採用されてから、二人三脚でフラックス結晶育成を研究してきました。もちろん、私が足を引っ張り、大石先生が起こしてくるということの繰り返しで、歩みを進めてきました。特に、結晶育成に『真摯に向き合う、コツコツ・丁寧に』を基盤に、育成した結晶の美しさに対する感動をいつまでも忘れないという本当の基礎を教えていただきました。まさに、フラックス法の醍醐味でしょうか。以前、編集後記などにも書きましたが、フラックス法との出会いに感謝しています。この感謝があったからこそ、この10年間、本研究会の事務局を務めることができたのだと思っています。大石先生は、酸化物単結晶のフラックス育成で時代を先導してきました。自身を振り返ってみると、信州を離れていた8年間の研究者生活(大日本印刷と名古屋大学)が、現在の私のフラックス結晶育成研究に非常に大きな影響を及ぼしています。フラックス法に『表面』を導入できたことです。つまり、結晶層・薄膜の作製にフラックス法を展開したことが私にとってはセレンディピティでした(あるいは、出会いとも言えます)。現在、我々の研究室ではこの結晶層(薄膜)形成技術をフラックスコーティング法と名付け、多岐にわたる産業分野での応用に取り組んでいます。日本フラックス成長研究会と歩んできたこの10年間で、当研究室オリジナルなフラックスコーティング法という技術を提案できたことに誇りをもっています。ただし、ようやく研究者としてのスタートラインに立ったに過ぎず、私の研究者としてのライフワークに掲げる『フラックス結晶育成の学理の体系化』には、より一層の好奇心と叡智の集結が必要であると痛感しています。自身が好奇心を失った時点で研究者としては終わりですが、人と人とのつながり無くしても実現できないと思います。そのような意味でも私はとても恵まれ、高所からフラックス研究を俯瞰し、総合的なアドバイスをいただける研究者(大石先生や本研究会の皆さま)あるいはさまざまな研究基盤(フラックス法以外の軸足)をもち、現在はフラックス結晶育成研究を超強力に推進する若手研究者(是津先生、我田先生、林先生など)とチームを結成できているということは大切な財産です。この10年で当研究室のフラックス結晶育成研究は大きく飛躍しました。次の10年でどのように展開できるか、大きな責任を背負いながらもとても楽しみです。せっかくの出会いでもあり、若手研究者の皆さんには、個々の軸足とフラックス研究を何らかの形で融合させ、新しい研究分野を切り拓いてほしいと思います。この10年間、私は大石先生の後ろ姿を追い続け、自身の足りない才能を努力で埋めようと研究・教育にコツコツと取り組んできました。当研究室の若い研究者にとっては、今度は私が後ろ姿を見せる番になっています。大石先生に比べるとはるかに低いハードルなので、楽々と乗り越えて、ワクワクするような研究を見せてほしいです。次の10年、フラックス結晶のように美しく成長できるか、初心を忘れずにと心に秘めて。

*Katsuya TESHIMA, 信州大学環境・エネルギー材料科学研究所/工学部環境機能工学科